

までのデータのまとめや文献の一气読み、実験計画の立案など、空いた時間を有効に活用した学生や教員も多かったと思う。

国内での移動制限やマスクをはじめとする医療用品の不足、国外での医療崩壊のニュースなど、現段階では大きな不安の渦中にある。しかし、種々の対策や政策、世界中で取り組まれているワクチンや治療法の開発により、近い将来、研究や教育が以前の通り行うことができる日常に戻ることを切に祈っている。

学生数は、博士前期課程 7 名 (M1 が 3 名、M2 以上が 4 名)、博士後期課程 1 名であった。

環境計画学専攻のこの一年

香川 雄一

環境計画学専攻長

2019 年度は、滋賀県立大学学位規程および大学院学則に基づき、論文提出によって 1 名 (環境意匠研究部門) に博士 (環境科学) の学位が授与された。また、環境意匠研究部門では 12 名、地域環境経営研究部門では 3 名の学生が博士前期課程を修了し、修士 (環境科学) の学位を授与された。

環境意匠研究部門では修士論文、修士設計のいずれかを選択するが、本年度は修士設計 7 名、修士論文 5 名と、昨年度と同様に修士設計数が修士論文数を上回った。環境との関係で建築や都市をとらえようとする環境意匠の視点が、今年も多く論文や設計に感じられ、頼もしく思えた。また、これも例年と同様であるが、フィールドワークや文献資料による緻密な調査、あるいはシミュレーションや実験の繰り返しによって得られたデータにもとづくものが多かった。最も優秀な研究の選考 (質疑応答や批評) が公開の場で行われ、論文 (竹を主構造とした建築物の経年変化後の構造性能に関する研究) に ED 賞 (環境デザイン賞) が贈られることとなった。

地域環境経営研究部門では、修了した学生のうち 2 名が、湖国近江の風土、歴史、文化を継承し、環境と調和した循環型地域社会を形成するために、地域診断からまちづくりへの展開を提案し実行する知識とスキルを備えた「近江環人 (コミュニティ・アーキテクト)」の称号を授与された。修了した学生には、大学院修士課程の当部門で学んだことを活かして、就職先の業務にも貢献できるように期待したい。

なお、環境意匠研究部門の在籍学生数は、博士前期課程 29 名 (M1 が 14 名、M2 以上が 15 名)、博士後期課程 4 名、地域環境経営研究部門の在籍